Deweyの認識哲学における認識と経験の関係に関する一考察 —Bollnowの視点を手がかりにして—

北川 治男

序
Ⅰ 経験の二つの形式
Ⅱ 状況を持つということ
（第一次的経験について）
Ⅲ 知覚について
Ⅳ 探究（第二次的反省的経験）の先行条件
Ⅴ 探究のプロセス
（事実の観察と観念形成）
Ⅵ 判断の構成
（主語の現実的内容と述語の観念的内容）
Ⅶ 知識獲得の二つの形式の関係
（Bollnow の場合）
Ⅷ 探究の二つの形式の関係
（Dewey の場合）
Ⅸ いくつかの問題点と結論(1)
（質的な題材を対象とする常識的探究と質的でない関係を対象とする科学的探究）
Ⅹ いくつかの問題点と結論(2)
（合目的的な題材を対象とする常識的探究と、合目的的でない関係を対象とする科学的探究）
終章 決定的な問題設定の転換

序

O. F. Bollnow は、最近の論文『認識哲学を構成するための考察』[1]の中で、伝統的な合理論的な認識論と経験論的な認識論を批判して次のように述べている。

「これまでの認識論——本質においてすでにデカルトによる近代哲学の初めにまで遡る古典的な認識論を短くこう言うけれども——これはあらゆる疑わしいものを排除して、確実な認識体系を一歩一歩進みながら構築していくことのできる“アルキメデスの点”を求めることに、その特徴があった。ここに近代哲学の基本的な二つの流れ、すなわち合理論的な観点と経験論的な観点とが一致していた。一つはまたその基礎を最初の命題の明証性に見い出し、他はそれに反して簡単な感覚の所与性の中にそれを見い出すことができると信じていたけれども、私はこの合理論的な方向はここでは論じない。——そして私は経験論的な方向に限定してみよう。この観点を短く特徴づければこうである。経験の中で得られた認識の究極の疑うことのない要素を獲得せねばならない時には、それは究極の最も単純な、それ以上還元できない感覚の中に与えられているはずである。経験主義はそれゆえに、ここから一歩一歩と自分を構築しようとする。しかし、この究極の簡単な感覚は存在しない。もっと詳しく言えば、そのような単純な要素は後からの考察によって初めて生まれる結果であり、初めは形態を全体的にとらえているのである。[2]」と。

すなわち、Bollnow がここで言わんとすることは、われわれは本質的に認識を決定的に確実な出発点から基礎づけるあらゆる試みを、断念しなければならないということである。そしてこのことを彼は〝認識におけるアルキメデスの点の不可能さの原理〟[3]と呼ぶ。

もう少し Bollnow の主張をたどってみることにしよう。彼によれば、

「われわれはむしろすでにいつも理解され意味づけられた世界の中に置か

れている。この世界がわれわれに全体として与えられていて、その中でのみ個々の知覚が行なわれるのである。われわれは、この世界の理解の全体から本質的に脱け出して、いわばゼロの地点から新たに世界についての認識を建設することはできない。われわれは、このすでに理解された世界の中に、努力して確実な認識を構築しなければならない。[4]」

Bollnow によれば、われわれの認識はそれゆえに、「本質的に土台から作り上げられるものではなく、これまで不十分に認識されているものを後から修正することである。[5]」そして「認識は初めからこの修正の構造の中で眺められなければならない。[6]」というのである。Bollnow は、この様な観点を彼の認識哲学を構成するための出発点としている。

さて、Dewey の認識哲学における認識と経験の問題を取扱おうとするこの小論文の最初に、以上のような Bollnow の所論を引用し紹介したのは、これから述べようとする Dewey の認識哲学にも、同様な観点が見られるように考えるからである。

例えば、Dewey の認識哲学においても、一方においては普遍的性格をもった究極原理が直接的な認識の対象であり、理性がそれらを把握する能力である、と主張する合理論的な認識論を批判しようという観点があり、他方においては、感覚または知覚が認識の能力であり、直接認識される事物は感覚性質あるいは感覚与件である、と主張する経験論的な認識論を批判的に乗り越えようという観点が、Dewey の認識哲学の出発点になっている。つまり合理論的な認識論であれ、経験論的な認識論であれ、絶対的な確実性を持った認識の体系を構築することのできる絶対的・基底的な基礎を探究することが、伝統的な認識哲学であったのであるが、Dewey は、そのような絶対的な固定した認識の出発はあり得ない、と主張するのである。すなわち、認識を根拠づけるためには、そのような絶対的基礎が必要であると考えるのは、幻想であるというのである。Dewey のこの観点は、Bollnow の〝認識におけるアルキメデスの点の不可能さの原理〟に相通じるものといえよう。

そしてさらに、Bollnow が、“認識におけるアルキメデスの点の不可能

さの原理に立って”「新しい認識は、それまでの古い理解を修正することによってのみ可能である」[7]と主張していることとの関連で言えば、Dewey も認識を探究という自己修正的な過程の途上に成立し、さらにつぎの探究にさらされるべきものとしてとらえている。Dewey によれば「認識は探究のコンテキストにおいて正当化されるのであり、探究それ自身は自己修正的な過程（a self-corrective process）である」[8]と考えられている。そしてさらに彼は「連続した探究の寄り集まり積み重なった結果が、一般的な意味での知識である」[9]と、知識を定義づけるのである。そして、Dewey は認識の結果を表わす言葉として、信念（belief）や知識（knowledge）という言葉よりも「正真正銘に確認できること（warranted assertibility）」[10]という言葉を使う方が、より適切に認識成立の事態を物語るものであると述べている。そしてここで彼が、現実性よりもむしろ可能性を示す言葉を使うのは「個々の探究の個々の結果はすべてたえず新たに始められ進行中の企ての一部にすぎない」[11]ということを認めるからである。すなわち、Dewey も Bollnow と共に、認識を「連続した過程（a continuing process）」[12]あるいは「循環的な作業」[13]としてとらえているのである。

しかしこの小論文のねらいは、Dewey と Bollnow の認識哲学を詳細に比較考察しようというところにあるのではない。そうではなくて、両者が認識哲学を構成するための出発点としたそれぞれの観点に、上述した様な共通点があることを一応作業仮設として前提し、そこからむしろ Bollnow の問題意識の光に照らして、Dewey の認識哲学を眺め、整理してみようというのが主なねらいである。

［注］

(1) ボルノー著、浜田正秀訳『人間学的に見た教育学』（玉川大学出版部、昭和44年）「世界教育宝典」のために著者が特別に書きおろしたもので、本書が同書の初版である。

(2) ボルノーの前掲書 p. p. 205～6

(3) ボルノーの前掲書 p. 207

(4) ボルノーの前掲書 p. p. 207～8

(5) ボルノーの前掲書 p. 208

(6) ibid.

(7) ボルノーの前掲書 p. 216

(8) Richard J. Bernstein : *John Dewey*, Washington Square Press, Inc., 1966, p. 112

(9) John Dewey : *Logic—The Theory of Inquiry—*, Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1964, p. 8

(10) Dewey, op. cit., p. 7

(11) Dewey, op. cit., p. 9

(12) Dewey, op. cit., p. 8

(13) ボルノーの前掲書 p. 208

I 経験の二つの形式

これからの所論を進める手懸として、われわれは、もう一点 Bollnow と Dewey のそれぞれの認識哲学の出発点になっている共通の観点を取上げてみたい。つまりそれは、理論的な認識に対する現実の経験の優先という観点である。すなわち Bollnow は「われわれは理論的な考察によって事物を眺めることを考える前に、その事物の意味と特性を実際の交渉によって経験するのである」[1]と述べ、さらに「われわれは認識を理論的な態度で基礎づけることはできず、われわれの世界の事物との現実の交渉にまで遡らねばならない」[2]と述べている。そして Dewey は「事物は認識される以前に味わわれるもの（things had）である」[3]あるいは「経験の中に現存するものは、ある特定の時に認識されるものよりも遙かに広く拡がっている」[4]と述べ、さらにより明確に「経験の領域（a universe of experience）は論議の領域（a universe of discourse）の前提条件である」[5]と述べている。

われわれはここではまだ、経験の概念を無批判的に用いている。しかしこ

の概念は、けっして一義的なものではなく、またけっして自明のものでもない。したがってわれわれは、次に認識が成立する基盤である経験の領域をまず問題にして、Bollnow と Dewey のそれぞれの経験の概念を今少し詳細に論じてみなければならない。

Bollnow は、"das Empirische（経験論的なもの）" という概念と "Erfahrung（経験）" という概念を区別している。まず "Empirie" という言葉は "試みる" "テストする" と同じ様な意味のギリシャ語の動詞 peirao から由来したもので、したがって "das Empirische（経験論的なもの）" という概念には、計画的になされる研究という能動的な性格がはるかに強く含まれているのに対して、"Erfahrung（経験）" には、心ならずも堪え忍ぶという受身の性格が強く含まれているという。この二つの概念の相違はまた "人が設ける研究" と "人がする経験" との区別でもある。一方の "研究" の方は、近代の自然科学の実験をそのひとつの典型とする科学の世界のものであり、それはいつも意識的な問いかけであり、明らかな調査である。したがってこの "研究" は計画的な構築が可能な領域、つまり人が自由にできる領域に属している。それに対して別の "経験" の方は、人がそれに委ねられている、すなわち自分で自由にできずに全く委ねられている生活現象の領域なのである。さらにまた Bollnow は、この二つの経験の形式を "学問的な経験" と "自然な（または学問以前の）経験" という言葉で区別し、それぞれの経験の性格を明らかにしようとしている。

ここから Bollnow の問題意識は次のように展開する。つまり彼はまず、いったい自然な生活経験の領域が方法的な経験論的な研究の手段によって、どの程度とらえることができるのか、と批判的に尋ね、方法上設けられた研究の領域の中でコントロールできないと思われる自然な経験を排除して、確実な認識を純粋に組み立てようと試みる経験論的な経験の概念の一面性を見抜いて、別の形式の経験（自然な生活経験）の所与性に注目し、そこから認識における経験論的な研究の独占的な要求に反対しようとするのである。そしてこの "経験" と "研究" という二つの面の相互に補い合う協力作用を正し

く理解して、それらを人間の認識の全体に正しい形で関連づけようとするのである。しかし今われわれは、Bollnow のこの問題意識の展開をこれ以上たどっていくことが、目下のねらいなのではない。そうではなく、ここでは次に Dewey の経験の概念を論じる手懸として、"経験" と "研究" という言葉で区別された知識獲得の二つの形式に注目することがねらいなのである。

さて次に Dewey は "experience as empirical" と experience as experimental" と いう二つの経験の概念を区別している。[7] "experience as empirical" は、過去の様々な行為や体験が記憶に蓄積された結果であり、それは洞察（insight）によってコントロールされてはいないけれども、現在の状況に対処するのに実際上有効なものである。"experience as empirical" はまた、生のままの知覚（original perceptions）であり、その知覚の結果をたまたま現在の行為に利用し応用しようとすることでもある。ただその場合、その知覚が生起した因果関係や、その知覚をもたらした手段やその知覚がもたらす帰結についての理解を欠いているのが、その特徴である。それに対して "experience as experimental" は、その経験が生起した条件やその経験がもたらす帰結についての理解に導かれているものを言う。

Dewey はまたこの二つの経験の概念を "primary experience（第一次的経験）" と "secondary or reflective experience（第二次的反省的経験）" という言葉で区別しようとする。[8] "第一次的経験" は、偶然性に委ねられたものであり、その対象は、普通の日常生活における事物であり常識の対象であるが、"第二次的反省的経験" は、継続的に統制された反省的探究の帰結であり、その対象は科学や哲学の対象であって、反省の結果導き出され精練された産物であり、組織的な思考の介入によってのみ経験されるものである。

さらにまた Dewey は、この二つの経験の側面を "consummatory phase（完成的な側面）" と "instrumental phase（道具的な側面）" という言葉で区別している。[9] つまり前者は、美的・道徳的経験（aesthetic and moral experience）の世界であり、利用と享受（use and enjoyment）の原理が支配する直接性（immediacy）の領域であり、非認識的経験（non-cognitive

experience）であるが、後者は、知的経験（intellectual experience）の世界であり、反省的思考（reflective thinking）の原理が支配するいわば間接性の領域であり、認識的経験（cognitive experience）であると要約することが可能であろう。

ここから、Dewey の問題意識は次のように展開する。すなわち彼の認識哲学の眼目は、第二次的な認識的経験を第一次的な非認識的な経験の沃野の中で正しく位置づけようとするところにある。このことを彼は「認識的経験は非認識的な種類の経験の中に起るものであらねばならない」[10]と述べ、「認識されたものにその意味を与える非認識的な経験の題材のコンテキストを排除することは全く不可能である」[11]と述べ、さらに「知識は生の経験の題材をより良くし豊富にする機能と任務を持っている」[12]と表現し、その場合にのみそれは妥当な認識である、と言うのである。

すなわち Dewey の認識哲学のねらいは、第一に、第二次的反省的経験によって精錬された方法や産物である科学や哲学の題材の起源を、あらゆる異質混交に充ち溢れている第一次的経験に立ち帰って探求し、それらの題材が、どのような必要と問題から生じ、どのような必要を満たしどのような問題を解決すべきであったのかを確認することである。さらに第二には、第二次的反省的経験が生み出した方法と結論とが、粗雑さと生硬さに充たされた日常経験の事物に立ち帰って証明を求める、ということである。[13]

以上でわれわれは、Bollnow と Dewey が、経験の領域をそれぞれ“経験”と“研究”“第一次的経験”と“第二次的反省的経験”という二つの概念で区別し、われわれの確実な認識は、これら二つの経験の形式を正しく関連づけるところに成立すると考えていることを見てきた。勿論ここでわれわれは、Bollnow の“経験”と Dewey の“第一次的経験”とが、そして“研究”と“第二次的反省的経験”とが、それぞれ相対応し、同じ意味内容を持つ対概念であると結論し、さらに経験の二つの形式を関連づける仕方が二人の場合で全く同様である、と推断するのは早計であろう。ただわれわれは、推論の手続きとして、両者の間にある以上のような問題意識の類似性を仮説

的に前提し、この前提を以下のわれわれの推論の理論的な枠組としたいと考えるのである。

さてこの章の初めに、Bollnow の認識哲学と、Dewey のそれの出発点に理論的な認識に対する現実の経験の優先という共通の観点があると述べたが、その現実の経験とは Bollnow が“経験”と呼び、Dewey が“第一次的経験”と呼ぶものであることが、ここで明らかになったことと思う。すなわちわれわれの認識の成立は、われわれの具体的な現実の生活経験に、その基盤を持っており、そしてその限りにおいてそれは認識として通用するということである。次章では、まずこのことをより詳しく取上げてゆきたい。

〔注〕

(1) ボルノーの前掲書 p. p. 209～10
(2) ボルノーの前掲書 p. 210
(3) John Dewey : *Experience and Nature*, Dover Publications, Inc., New York, 1958, p. 21
(4) Dewey, op. cit., p. 20
(5) Dewey : *Logic*, p. 68
(6) ボルノーの前掲書 p. 180
(7) John Dewey : *The Quest for Certainty*, Capricorn Books, G. P. Putnam's Sons, New York, 1960, p. 81
(8) Dewey : *Experience and Nature*, p. p. 2～3
(9) Dewey, op. cit., p. 400
(10) Dewey, op. cit., p. 23
(11) ibid.
(12) Dewey, op. cit., p. 22
(13) Dewey, op. cit., p. 36

Ⅱ　状況を持つということ

（第一次的経験について）

ここでもわれわれはまず Bollnow から始めよう。前述の Bollnow の“認識におけるアルキメデスの点の不可能さの原理”によれば、われわれが初めから本質的に前提のない認識を求める努力は無駄である、ということであった。そしてわれわれはむしろ、いつもすでに理解された世界の中に置かれており、より確実な知識を求める努力はすべて、認識を一歩一歩確立し、必要に応じては修正しようと試みながら、このすでに初めに与えられた知識の中を動くことができるにすぎない、というのであった。したがって Bollnow によれば、確実な知識と単なる意見との間に決定的な境界を引くことはできない。決定的に確実な知識は本質的に存在しないものであって、確実さの諸段階があるだけである。そこで知識の根拠を意見のふところから導き出し、そこから生じる問題を明確に考え抜いていく所に、われわれは自分の認識を確立することができる、というのである。すなわち彼は、われわれがいつもすでによく知っている世界、その意味の分かっている世界、さらに言い換えれば、「合理的ではないがまったく経験にあふれる確実さ」[1]ともいうべき「意見の層」[2]から出発し、これを認識の最も本源的な形として土台にし、この土台の上により確実な認識を発展させようとするのである。以上が Bollnow における自然な“経験”と認識成立との内的関係である。

次にわれわれは Dewey における“第一次的経験”と認識成立との内的関係を跡づけてみたい。Dewey がまず認識の原初型体を有機体が環境との相互作用の中で、環境との不均衡を脱け出して均衡を回復しようとして行なう追求や探索の中に見出していることは、周知のことである。われわれはここで Dewey における認識成立の生物学的基盤をこれ以上たち入って考察しようとは思わない。

われわれは Dewey の“第一次的経験”とは、「状況を持つこと（to have

a situation）」[3]に他ならない、ということから出発したいと思う。つまり人はひとつの状況をもつことを逃れることはできない。それはまさに経験をもたないことに等しいからである。ある特殊な質的な状況が、あらゆる経験の背後に存在し、その経験の性質を決定し、その経験をコントロールしている。このような事態が“第一次的経験”という概念に含まれる意味内容であり、Dewey はわれわれの認識が成立する基盤を、このような経験の事実にまで遡ろうとするのである。

さてわれわれが経験する状況は、たんに“楽しい”とか“苦しい”とかいう様な一般的な性質によっては表現できないある独特な質的な全体である。そして状況がひとつの全体であるのは、状況のもつ直接的な広く行きわたった性質によるのであり、この状況に広く行きわたった質的なものは、たんに状況のすべての構成要素をひとつの全体にまとめるだけでなく、独特の性質をもっており、各々の状況を独自の状況にするものである。ある状況の性質はある経験に含まれたあらゆる対象や出来事に行きわたりそれらを色づける。それは当然「感じられる何か（something that must be had）」[4]であって、言葉で表現できないものである。すなわち、状況は質的な全体として感覚され感じられる。したがって状況はそれ自体では知識の対象にはならないのである。

次に Dewey は、“状況”という概念と“対象”“出来事”という概念とを区別して、次の様に述べている。「状況という言葉のさすものは、単一の対象や出来事ではなく、一連の対象や出来事でもない。というのは、われわれは、けっして対象や出来事を切り離して経験したり判断したりすることはなく、つながりのある全体が、いわゆる状況である。」[5]そしてまた同様に次のようにも述べている。

「現実の経験には、けっしてそのような個々ばらばらの対象や出来事はない。ひとつの対象なり出来事なりは、つねにまわりの経験された世界――すなわち状況――の特定の部分であり、一面である。」[6]すなわち Dewey によれば、われわれは現実の全体的な環境とのつながりのなかで生活し行為してい

るのであって、われわれにまず与えられているのは直接的全体的な経験すなわち“第一次的経験”である。個々の対象は、認識的経験の中でむしろ後から反省的思考の結果として把握される「反省の対象（a reflective object）[7]」なのである。このことを Dewey は、次のように述べている。

「厳密な意味で“与えられた”ものは、場全体あるいは状況全体である。対象であれ、性質であれ、単一なものという意味での与えられたものは、現に目の前にある状況の特定の局面であり、情勢であり、構成要素であって、そのときそこで行なわれる探究に関連づけながら、その状況の問題の特徴を位置づけ確認するために、選ばれたものにほかならない。厳密な意味では、それは“与えられた”というよりも“とりあげられた”のである。[8]」

すなわち Dewey によれば、「常にある場（a field）が存在するのであって、その場の中で、あれこれの対象や出来事が観察されるのである。[9]」つまり、われわれが状況の問題に適応し反応する必要が生じた時、言いかえれば、「場の緊迫とともに、対象や性質は“観察”の対象となる[10]」のである。ここから、われわれの認識的経験が開始される。そして以上の様な意味で、この認識的経験である「観察は、周囲の場全体の中で、特定の対象または性質を限定的にあるいは選択的に確定することとして、正確に定義できよう。[11]」

しかし認識的な観察された事実だけからは何もでてこない。われわれは、あれこれの事実を認識する前に、状況全体の性質に敏感でなければならない。Dewey はこのことをこう述べている。すなわち、われわれは「問題を述べる前に、問題を感じなければいけない。状況の独得な性質を直接感じるとき、そこには観察した事実を選択し、比較考量し、概念として整理することをたすける何かがある。[12]」と。

われわれは本章で、まずわれわれの“第一次的経験”に与えられているのは、ある独特な質的な全体としての状況であることを述べ、われわれの認識的経験が始まるのは、この様な状況の問題にわれわれが適応し反応する必要が起った時であることを見、さらにわれわれは、与えられた状況全体の性質に敏感でなければ、認識活動をコントロールすることはできない、というこ

とを眺めてきた。前述した「経験の領域は、論議の領域の前提条件である」という Dewey の言葉は“第一次的経験”と認識成立の上述した様な内的関係について述べたものに他ならない。

さて、われわれは、ここで推論の角度を変えて、しかし本章で述べたことと同じ連関を、われわれの知覚や意識経験がどの様にして成立し、どの様な性質を持つものであるか、という側面から、次の章で取り扱ってみたい。

〔注〕

(1) ボルノーの前掲書 p. 214
(2) ボルノーの前掲書 p. 215
(3) Dewey : *Logic*, p. 69
(4) Dewey, op. cit., p. 70
(5) Dewey, op. cit., p. 66
(6) Dewey, op. cit., p. 67
(7) Dewey, op. cit., p. 70
(8) Dewey, op. cit., p. 124
(9) Dewey, op. cit., p. 67
(10) Dewey, op. cit., p. 150
(11) ibid.
(12) Dewey, op. cit., p. p. 70～1

Ⅲ 知覚について

われわれはもう一度 Bollnow の言葉を借りて、本章でのわれわれの問題意識を先取りして言及することができると思う。Bollnow は知覚の機能について、次の様に述べている。

「知覚で大切なのはいつも、慣れたすでに存在する世界の中へ何か新しいものが現われることだ、という特徴なのである。知覚は変化に関係があ

る。感覚が瞬間ごとに私に提供する無数の物の中から、私は特別な選択によってきわめて僅かのものしか知覚しない。ここに知覚のきわめて特殊な意味深い機能がある。知覚は、環境の中の恐らくは切迫した変化に注意して、日常の生活の流れをそれによって中断させ、必要によっては適切な答えを出させる警戒信号なのである。[1]」

こうして Bollnow は、知覚がいつも知覚の前にすでに存在する理解された世界と関連している、という事態に注目している。われわれが知覚するものは、彼によれば、いつもこの理解された世界の中にすでに意味づけられている。したがって「われわれは決して認識された世界の全体を、個々の知覚から組み立てることはできずに、われわれは知覚をすでに理解された世界からとらえなければならない。知覚はそれゆえに、認識を組み立てるふさわしい出発点ではない[2]」のである。すなわち Bollnow によれば、知覚は、まず(A)すでに存在する理解された世界の意味の変化に関係したものであり、したがって(B)知覚は理解された世界の中にすでに意味づけられているものであって、(C)認識のふさわしい出発点に置かれるものではないのである。

さてわれわれは、Dewey においても同様の問題意識の展開を見ることができる。ちなみに Dewey は、(A)われわれの意識は、出来事や現存する事物そのものを知覚することではなく、それは「意味に気づくこと（awareness of meanings）」あるいは「現実の出来事をその意味において（in their meanings）知覚すること」であるととらえ、[3] その意識を次の様に定義づけている。つまり「意識とは……ある特定の時に方向転換（re-direction）と移行的変容（transitive transformation）を受けつつある特定の意味体系（a system of meanings）の一面である。[4]」あるいはまた「意識とは改造の過程にある（in course of remaking）出来事の意味である。[5]」すなわち Dewey においても、Bollnow と同様、意識は変化に関係するのである。われわれが今までとは異なった見慣れない状況におかれ、新しく適応する必要が生じた時、その状況の意味を分解し、改造しようとする知覚が生まれる。有機体と環境とがうまく統合されている時には、スムースな無意識的な行為

の流れがあるが、知覚的意識が起るのは、この様な行為にためらいが生じる時である。言い換えれば「直接的な不確実性や最もさし迫った必要点が意識の絶頂、つまり意識の緊張した焦点的な様式を定義づける[6]」のである。そしてそれは、従来無意識に受け容れられてきた意味に方向転換、再適応、再組織が必要となった点なのである。この様に Bollnow と同様、Dewey においても、意識はすでに受け容れられてきた意味の変化に関係がある。

そして(B)またわれわれが読書する場合、今読んでいる文章の浮かんでは消えて行く意味、現時点での焦点的なさし迫った観念が、既に読み終った部分の組織化された意味の体系の中で初めて意味づけられ、同時にあらかじめ存在する意味の体系に新しい意味を付与していく様に、あるいはまた観劇の際に、ある劇の目下くりひろげられている場面の情緒的知的意味が、眼前に展開し作用しつつある背景的な意味の連続の中で初めて規定され、同時にその意味の連続に予期せぬ変化を加えていく様に、われわれの意識が存在するところには、そこに一つのストーリー、何らかの全体、統合された一連のエピソードが存在しなければならず、この様な一貫した全体が、ある特殊な過程における意識の背後に拡がっていて、その意識を条件づけるのである。そして同時にわれわれの意識の実体は、断続的で不連続なものであり、一連の信号の閃きや電信の発信音の様なものであるが、その意識は、形成過程における意味の連続を含んでいるものなのである。ここで Dewey が、Bollnow と同様、われわれが意識し知覚するものは、われわれの意識や知覚に先立って既に存在している世界の意味について、われわれがあらかじめ持っている理解との関連で規定され意味づけられるものである、と考えていることが明らかになったことと思う。

次に(C) Dewey は、(1)知覚をもっぱら認識的なものと考えたり、あるいは(2)知覚を感覚知覚（sense-perceptions）に限定し、それを認識を組み立てる出発点とする考え方に批判的である。

まず Dewey によれば、(1)知覚は認識活動に従属するものではなく、したがって真・偽というカテゴリーとは一応無関係に存在する。そして彼によれ

ば、知覚は、意識の他の様式つまり感情や思考や回想や空想や想像と同様になによりもまずわれわれの愛憎の念や幸不幸の感じや欲求と密接に関連したものであって、知覚は必ずしも本来的に認識的な性格を持つものではない。したがってあらゆる知覚は、それが現に存在する事物に気づくことであれ、現に存在しない事物に気づくことであれ、それらが共に、従来無意識に受け容れられてきた出来事の意味が改造を迫られる様な事態に生起する直接的な意識経験であるという点において、皆同じ種類のものであって、それら相互の間に本質的な差異はない。したがって馬の知覚を持つと言うことと、人馬(centaur)の知覚を持つと言うことの間には、それぞれの知覚を持つという限りにおいて、一方が客観的に妥当な知覚であり、他方は空想的神話的で妥当な知覚ではないという様に、両者を区別する根拠も必要性もない。しかしわれわれがたんにある知覚を直接的に持つという次元から一歩を踏み出し、その知覚の内容を断言したりその知覚の内容を信じたりする次元に足を踏み入れる時、事態は異なってくる。それは「認識すること、信じることは、意味を持つこととは別な、それ以上の何かを含んでいる」[7]からである。つまり今われわれは、たんにある知覚の意味を持つという段階からその意味を認識するという段階、言い換えれば、ある知覚がどのような原因的先行条件(causal antecedents)の下に生じたのか、またその知覚がどの様な帰結をもたらすのかということを反省的にとらえていこうという段階に足を踏み入れたのであるが、この段階に到って初めて、われわれは知覚の認識的な意味を美的文学的意味から区別することができ、さらに妥当な認識的意味と妥当でないそれとを区別することができるのである。常識は、われわれの知覚がどの様な意味を持つものであれ、それぞれの知覚の内容を現実のものとして受け入れる。科学や哲学における反省的思考のみが、夢の対象と科学の対象とを区別することができるのである。この様に知覚は必ずしも本来的に認識的な性格をもつものではないのである。

さて次に Dewey は(2)知覚を感覚知覚に限定し、それを認識を組み立てる出発点とする考え方に反論を加えている。つまり彼は、われわれの外にある

事物を直接的に本来的に言及する素朴で単純な原初的な感覚知覚が存在して、そこからわれわれは一歩一歩と外界についての確実な認識を構築していくことができるという考え方を否定する。われわれが知覚する対象は、感覚与件でも感覚与件の複合体でもない。それはあらかじめある意味連関の中に組み込まれた出来事なのであって、初めから質的な何かである。

Dewey によれば、われわれの感覚知覚は、知覚の中でも、むしろ極めて選り抜かれた人為的なものであって、素朴なものでも単純なものでもない。つまり感覚知覚は、出来事の意味を受け取り利用するひとつの仕方なのであって、特に事物の原因的条件や帰結を探究する過程で作用し、推論的判断(inferential judgement)を形成する認識のひとつの機能なのである。したがって Dewey は、この感覚知覚の対象である「感覚与件(sensa)は、他の意味を立証し修正する時に用いられる還元不可能な意味の一群(class)である」[8]と述べ、それらは極めて方法的な認識的操作を経て、むしろ後からとり出されたものであり、したがって認識の出発点におかれるものではない、と考えている。

すなわち Dewey は「与件(data)」について次の様に述べている。「与件は、孤立したものではなく、完全でも自己完結的なものでもない。与件であることは、探究の題材のコントロールに特別な役割を果たすことである。それは、ひとつの可能な解決を示すような問題設定を具体的に表わしている。それはまた、仮説的に受け容れられた解決法をテストする証拠を提供するうえに役立つ」[9]と。

ここにおいてわれわれは、Dewey においても、Bollnow が、われわれは個々の知覚から外界についての認識を組み立てることができるのではなく、むしろ知覚をすでに理解された世界からとらえねばならない、と主張し、その意味で知覚は認識を組み立てるふさわしい出発点ではない、と述べているのと類似の問題意識があることを、明らかにすることができたと思う。すなわちわれわれは、そこから認識を一歩一歩構築していくことができる様な、あらかじめ与えられた素朴で単純な感覚知覚の所与性に疑いの目を向けた

Bollnow の問題意識を手懸にして、さらにそこから、感覚知覚はむしろ探究の過程で方法的な認識的操作を経て後から取り出されたものであると考え、そのような感覚知覚が推論的判断の形成において果たす積極的な役割について言及した Dewey の所論を跡づけてみたのである。前章で述べたこととの関連でいえば、Dewey においては、知覚はその身分と能力において本来的に認識的なものであるというよりは、まず何にもまして、利用と享受の原理が支配するわれわれの“第一次的経験”の領域に深く根をおろし、それと密接な関係を持つものである、と考えられているのである。

〔注〕

(1) ボルノーの前掲書 p. 212

(2) ボルノーの前掲書 p. 213

(3) Dewey : *Experience and Nature*, p. 303

(4) Dewey, op. cit, p. 308

(5) ibid.

(6) Dewey, op. cit, p. 312

(7) Dewey, op. cit., p. 322

(8) Dewey, op. cit., p. 327

(9) Dewey : *Logic*, p. 124

Ⅳ 探究（第二次的反省的経験）の先行条件

以上の二つの章で、われわれは Bollnow と Dewey について、われわれが確実な認識を本質的に前提のない決定的に確かな土台の上に築こうという希望はかなえられるものではなく、むしろ“自然な生活経験”や“第一次的経験”の中で、われわれがあらかじめ持っている世界についての理解の中に、われわれの認識の出発点があることを、眺めてきたのである。すなわち Bollnow においては、「合理的ではないがまったく経験にあふれる確実さ」

ともいうべき「意見の層」から出発して、その意見の修正のプロセスの中で、より確実な認識が一歩一歩成立する、と考えられており、Dewey においては「経験の領域が論議の領域の前提条件である」と定式化して述べられていたのである。すなわち Dewey によれば、われわれに与えられているのは、まずある特殊な質的な状況を持つという直接的経験であり、もしわれわれがそこに何らかの問題を感じていなければ、われわれは認識的経験へと踏み入ることもないし、その問題状況全体の性質に敏感でなければ、そこに展開される認識的経験を正しくコントロールすることもできない、と言うのであった。

われわれは今や“第一次的経験”の領域から“第二次的反省的経験”の領域へと足を踏み入れようとしている。この章ではまず Dewey における“第一次的経験”から“第二次的反省的経験”への経路を明らかにし、次の二つの章で、その認識的経験すなわち探究がどの様にして成立するか、そのプロセスを跡づけてみたい。

さて Dewey によれば、われわれの認識的経験すなわち探究が開始されるのは、われわれがある特定の問題状況にまきこまれた時である。その問題状況それ自体は「認識以前（precognitive）[1]」のものであり、それは知的なものでも認識的なものでもない。その問題状況を直接経験する個人の側から見れば、とにかくそれは困惑させられる状態であり、かき乱された、困った、曖昧な、混乱した、矛盾する傾向に満ちた、不明瞭な状況なのである。Dewey はこの様な問題状況を「不確定な状況（the indeterminate situation）[2]」と呼び、これが探究の先行条件であると述べている。探究をひきおこす不確定な状況の基本的な性格は、それが何らかの意味でとにかく「疑わしい（doubtful）」あるいは「疑いうる（questionable）」ということである。[3] そしてわれわれは疑問を持つとき探究し、疑問に対する答えを求めるときに探究するのである。

われわれがここで“不確定な状況”と言う時、たとえ現実の環境条件がそれ自体全く確定しているときでさえ、その意義については、すなわち有機体

との相互作用においてそれが何を表わし、何を前触れしているかについては不確定である場合もある。このことは、充分注目しなければならないことである。したがってある特定の状況が、"不確定"であり"疑しい""疑い得る"という時、有機体がその状況の意味をどのように受けとめるかということが直接的な問題点となる。

しかし Dewey は、状況は"主観的"な意味でのみ疑わしいと考えるのは誤りである、と述べている。[4] すなわちもともと状況が疑わしいから、われわれが疑いを持つのである。ある現実の状況から生じたものでない個人的な疑惑状態は病的なものであって、これが高じると強迫観念や現実逃避となる。それに対して不確定な状況は、われわれの個人的な心理状態を操作しても、それを打開し一掃し整理することができるものではないのである。したがって「不確定な状況の解決は、能動的であり操作的である」[5]必要がある。すなわち、われわれを取り巻いている環境条件がどの様な現実的な結果をもたらす可能性があるかということが予想され検討されて、多くの可能性の中のあるものが、最終の現実的な状況の中で実現される様に、われわれの認識操作がコントロールされるとき、それが探究の名に値する探究となるのである。

そしてさらに不確定な状況の不確かさは、たんに漠然とした不確かさなのではなく、その状況をまさにあるがままの、二つとない状況たらしめる独特の疑わしさである。この独特の性質がわれわれに特殊な探究に従事することをうながし、その特別な手続きをコントロールするのである。

ここで Dewey は、探究を次の様に定義づけている。すなわち「探究とは、不確定な状況を確定した状況に、すなわちもとの状況の諸要素をひとつの統一された全体に変えてしまうほど、状況を構成している区別や関係が確定した状況に、コントロールされ方向づけられた仕方で転化させることである。」[6] ここで言う"不確定な状況"とは、探究に対して"開かれて"いる認識以前の経験の領域であり、"第二次的反省的経験"である認識的な探究は、この様な経験の領域を先行条件として初めて生じるのである。次に"確定した状況"とは、探究の結果として"閉じて"おり、完成した状況であって、それ

は再び経験の領域への帰還でもある。そしてさらに"コントロールされ方向づけられた"という言葉で、Dewey が意味していることは、「探究に含まれた操作が客観的に統一された現実の状況を実際に確立する度合によって、探究の有効性がきまる」[7] ということである。われわれはまたしてもここで Dewey とともに、認識の仕事がどれほど深くわれわれの現実の生活経験に根差し、またそれと密接に結びついたものであるかを知るのである。

〔注〕

(1) Dewey : *Logic*, p, 105
(2) Dewey, op, cit., p. 105
(3) ibid.
(4) ibid.
(5) Dewey, op. cit., p.107
(6) Dewey, op. cit., p. p. 104～5
(7) Dewey, op. cit., p. 105

V 探究のプロセス

（事実の観察と観念形成）

われわれが"第二次的反省的経験"すなわち探究へと踏み出す第一歩は、われわれが巻き込まれたある特定の状況が探究を必要としていることを見てとることである。そしてさらにその問題状況が探究を受けるために提出した問題は何かが分かれば、探究はうまく進む。逆にそこに含まれた問題をとり違えれば、今後の探究が的はずれとなり、道に迷う原因となる。勿論そこに問題がなければ暗中模索しかないことは言うまでもない。この様にわれわれの問題のたて方如何で、問題状況を構成している諸要素がもたらす様々の暗示のうち、特定のどの暗示を受け容れどれを無視するか、あるいはどのデータを採用し、どれを拒否するかが決まる。それは仮説や概念構造が適切かど

うかの規準でもある。つまり、「われわれが可能な解決として何を受け容れ、何を排除していくかは、われわれがその問題をどのように定式化するかにかかっている」[1]のである。

さらに問題状況をひとつの問題として述べても、設定されたその問題が、ひとつの可能な解決と結びつく様に述べる必要がある。うまくたてられた問題は、まさに既に解決の途上にあると言うことができ、したがって真の問題を決定すれば、探究は前向きとなるのである。すなわち「解決できそうな問題が探究者にひらめくときは、それ以前に多くのことが摂取され消化されている」[2]のである。あるいはまた「われわれがある解決に近づけば近づく程、問題が何であるかがそれだけ明瞭になる」[3]ということもできよう。いずれにしても Dewey においては、「"問題" と "解決" とは相互に関係づけられている」[4]といえよう。

こうしていていよいよ探究活動が開始されることになるが、Dewey はこの探究が成立するプロセスを、どの様にとらえているのであろうか、それがわれわれの次のテーマである。Dewey によれば、不確定な状況を統一され確定した状況に転化する探究は、機能的に対応した二種類の操作によって達成される。まず操作のひとつは、実験観察の諸操作であり、もうひとつの操作は、観念的概念的操作である。前者は、ある特定の問題状況を構成する諸要素を観察し、そこに含まれた問題を提示し位置づけ記述する。それに対して後者は、観察の諸結果を解釈し、それに基づいてある可能な問題解決の方法を提案する。これら二つの操作の機能的な相互関係の中で、与えられた問題状況における事実条件と観念的概念的素材が設定される。この両者の設定と内容はその問題状況に広く行きわたった性質に支配され、両者はともに働いてその問題状況を解決し統一することができるかどうかによって、最終的に吟味される。この様な二つの操作の連続的な相互作用によって探究は進行していくのであるが、このプロセスを今少し詳しく跡づけてみよう。

まず観察によって決定される事実条件について述べてみよう。Dewey はある特定の問題状況における事実条件が、探究の進行とともに次々と設定さ

れていくプロセスを「そのケース毎の事実（facts of the case）」→「事実（facts）[5]」という図式でとらえている。われわれがある特定の問題状況に巻き込まれた時、その状況が完全に不確定のままであれば、けっしてそれを明確な構成要素をもつ問題に転換することはできない。したがって第一歩は、与えられた状況の中で、構成要素として決定できるものをさがしだすことである。"そのケース毎の事実" とは、この様にして確認された観察可能なその状況の構成要素のことである。それらは適切な解決をもくろむために考慮されねばならない条件であり、問題の諸項目である。それらはいわば「かりの事実（trial facts）」であり「暫定的な事実（provisional facts）」である。[6]しかしこれらの事実から、与えられた問題状況を解決する方法がひとつの観念として暗示され、その観念によって導かれた新しい事実条件と "そのケース毎の事実" が相互に組織づけられ、筋道だった全体を形成することができ、その観念の妥当性を証明する証拠としての役割を持つと判断されれば、それらは "そのケース毎の事実" 以上の "事実" となる。こうして探究の進行と共に、事実の観察はよりコントロールされたものになっていく。

次に観念的概念的素材が次々と設定されていくプロセスに目を転じてみよう。Dewey はこのプロセスを「暗示（suggestions）」→「観念（ideas）[7]」という図式でとらえている。まずある特定の問題状況の事実条件が、観察によって確保され決定されれば、可能で適切な解決法がそこに暗示される。すなわち問題の諸項目（つまり "そのケース毎の事実"）が観察によって設定されるとき、可能な解決法がひとつの観念としてあらわれる。観念は、初めのうちは、ただ "暗示" として生じる。暗示はまさに湧きでる、あるいはひらめく、あるいは浮かびあがる。しかし暗示はまだ論理的な身分をもたない。観念はすべて暗示として発生するが、暗示がすべて観念になるわけではない。暗示は、与えられた問題状況を打開する手段としての能力をもつかどうかの検討を経て、初めて "観念" となる。観念は、観察された事実条件のもとで問題解決のために採り得る方法とその結果の予想あるいは予測として生じる。Dewey によれば、観念は知覚や印象のたんなる写しではなく、以

上の様な予想的性格を持ったものである。[8] したがってまた観念はたんに“心的なもの”でも幻想でもない。すなわちこの予想は、一連のコントロールされた実験観察と、その実験観察の結果を解釈する一連のコントロールされた概念的方法に根ざしている。そして観念は現実の条件に働きかけるための提案であり計画であって、今後の実験観察の操作をうながし方向づけ新しい事実に光を当て、選ばれたすべての事実を組織してひとつの「整合的な全体(a coherent whole)[9]」をつくる。こうして探究は、問題とその可能な解決をつぎつぎに決定していくことであるから、観念は到達した探究の段階に応じてより明確になっていく。

さて以上別々に述べたことからも明らかな様に、事実の観察と、可能な問題解決を表わす観念は、たがいに対応して生じ発展する。その場の事実が、観察の結果ますますあらわになればなるほど、これらの事実が構成する問題を処理する方法の概念がより明瞭となり、より適切となる。他方また、観念が明瞭になればなるほど、状況を打開するために行なわねばならない実験観察の操作がよりコントロールされたものとなる。この様な二つの操作の機能的な相互作用の中で進行する探究の過程を今一度整理して述べておこう。観察された事実が、可能な解決を表わすひとつの観念をさし示す。この観念がさらに実験観察をひきおこす。新たに観察された事実が、以前に観察された事実と結びつき、証拠として役立たない他の観察された事物を除外する。整理しなおされた事実は、ひとつの修正された観念(仮説)を暗示し、その観念は、新しい実験観察をひきおこす。その観察の結果は、さらにまた事実を整理しなおし、こうしてついに統一され完結した現実の秩序が生じる。このような連続的な過程のなかで、可能な解決を表わす観念が、テストされ証明されていくのである。われわれが問題状況を解決しようとして行なう探究は、以上の様な一連の連続的な過程として成立する。

ここでわれわれが言及しておかなければならない二つのことがある。それは、観察された事実と受け容れられた観念の暫定的・仮説的性格と、両者の操作的性格についてである。すなわち事実条件は、探究に先立ってあらかじ

め与えられているものではなく、探究の過程で連続的な実験観察の操作によって、ある特定の事実が強調されたり無視されたり、また別の事実が選択されたり排除されたりしながら、たえず新たに整理され組織し直されていくといった、暫定的な性格を持っている。また観念は、実験観察によって事実条件がより明らかになっていくにしたがってたえず修正され、最初暗示された観念よりもあきらかに当面の問題に適した観念へと明確化されていくといった仮説的な性格を持っている。さらに実験観察によって確認された事実条件は、観念をテストする現実の素材を提供し証拠としての役割を果たす点において操作的であり、観念は新しい実験観察をうながし方向づけ、新しい事実を提供する点で操作的である。

以上が Dewey における探究成立のプロセスである。この章でわれわれは、認識を初めから本質的に前提のない出発点に基礎づけることはできないのであって、観察された事実から暗示される問題解決の方法とその結果の予想として生じる観念を、新たな観察によって確認された事実条件との相互作用の中で次々と修正し、実験的な操作によって、仮説的な性格を持つ観念をテストし証明していく、という連続的なプロセスの中で、その観念をより明確化していくところに、われわれのより確実な認識が成立するということを見ることができたと思う。

[注]

(1) Bernstein : *John Dewey*, p. 106
(2) Dewey : *Logic*, p. 108
(3) Bernstein, op. cit., p. 106
(4) ibid.
(5) Dewey, op. cit., p. 114
(6) ibid.
(7) Dewey, op. cit., p. 110
(8) Dewey, op. cit., p. 109
(9) Dewey, op cit., p. 113

Ⅵ 判断の構成

（主語の現実的内容と述語の観念的内容）

前章でわれわれは、認識がいかにして成立するかという問題を探究のプロセスという観点から眺め、その探究は事実条件の観察と観念形成という二つの操作を要求することをみてきた。本章では、やはり同様な連関を、今度は判断の構成という観点からみて行きたい。Dewey によれば、判断とは決着のついた探究の結果であり、その判断の構造は、主語――述語という一対の区別ならびに関係とみなすことができる。

そして探究のプロセスについて前章で述べたこととの関連で言えば、「出来事に関して観察された事実は、問題に光を当て、その解決の証拠となる素材を提供する、という二重の役割において、伝統的論理学のいう“主語”を構成する。また、ひとつの可能な解決を予想し、実験観察という操作を方向づける概念内容は、伝統的論理学のいう“述語”を構成する。そしてこれらの役割と操作がたがいに対応して“コプラ”を構成する。」[1]このように Dewey によれば、主語の現実的内容と述語の観念的内容が、相互に機能的に関係づけられ相互に対応するように決定されていくプロセスの中で、判断は構成されていく。

われわれは Dewey にしたがって、まず判断の“主語”について考察してみよう。彼によれば、論理学上の主語は、述語によって限定されるために判断に直接与えられた対象や感覚与件ではなく、また存在論的な実体（substance）でもない。主語の題材は、この対象あるいはこの性質という形で、われわれの感覚・知覚や思考に、既成品として与えられるものではない。Dewey によれば、主語の題材は、思考すなわち探究という過程の中で、あるいは過程によって、ひとつの包括的な問題状況を構成する諸要素の中から、実験観察という操作を経て、選び出されたり制限されたりした何らかの事実内容なのである。したがって彼によれば、判断の主語の問題は、問題状況を

構成する諸要素の中から、ある存在を厳密に選び出し、問題を限定し、その問題解決の方法をテストする証拠としての素材を提供するという、いわば“主語づくりの（subjection）”の行為もしくは操作の問題なのである。

そして Dewey は、主語となるものがみたされねばならない探究の条件として次の二条件をあげている。[2] まず、(1)その主語は、ひとつの可能な解決を示すように問題を限定し記述しなければならない。そして(2)それが主語となるときには、ひとつの可能な解決を表わす暫定的な述語によって方向づけられた実験観察の操作から生れた新しいデータが、その主語の題材と結合してひとつの整合的な全体を形成することである。こうした整合的な全体が、論理的な意味での実質的な対象を構成するか、さもなければ将来実質的な対象になる。いくつかの性質は、それらがもたらすあるいはもたらすであろう、もろもろの結果によって関係づけられ、ひとつの対象を構成するのである。Dewey はこのことを「対象とは、これこれの現実的な結果を生む可能性とみなされた一連の諸性質である。」[3] と述べている。すなわち対象とは、探求によって生み出され、一定の形に整理されたかぎりでの題材であると言えよう。そして Dewey によれば、このような対象が、判断の主語の題材となり得るものなのである。

次にわれわれは、判断の述語について考察しよう。さてわれわれが今、論理的な主語を論じた際、そこには既に、述語の論理的な意味が予想されている。なぜなら、Dewey によれば、主語の現実的内容と述語の観念的内容には、厳密な関連があるからである。彼によれば、判断の述語内容を形づくるものは、問題の可能な解決法として暗示され、したがって実験観察という今後の操作を方向づけるために利用される意味内容や概念構造である。そしてその述語内容は、事実内容すなわち主語に対して、可能なものが、現実的なものに対してもつのと同じ関係をもつ。すなわち、述語内容がさし示す問題解決の方法は、論理的には実験観察という操作を誘発し方向づけるはたらきをする。しかし問題解決の方法は、それだけでは解決できない。実験観察の操作が行なわれ、その結果が、すでに確認された事実と結びつき、ひとつの

統一された全体的状況を形づくるとき、探究は終結する。この意味で、述語の概念的合理的な内容は、仮説とみなされるべきものなのである。

要するに、Dewey によれば、判断の述語の問題は“述語づけ（predication)”の問題であり、しかも何に対してどのように述語づけるかという決定を、前もって固定し用意しておくことはできない。述語はすべて観念構成的であり、概念的である。それは、実験観察の操作を方向づけるように構成されねばならない。その操作の結果、いま扱っている問題に光が当てられ、それが解決したという証拠がつけ加えられる様なものでなければならない。当面の問題によって限定されることなしに、何が述語づけられるか、あるいは述語づけられるべきか、をきめる規則はない。

さて次にわれわれは、コプラについて考察するが、主語と述語を結びつけることの論理的な意味は、主語と述語について上述したことのなかに含まれている。Dewey によれば、主語と述語の結合は、独立した個々の事柄ではなく、また独立に外から与えられた単一の主語（それが対象であれ性質であれ感覚与件であれ）に、とにかく述語をつけ加えるといったことでもない。

すなわち Dewey によれば、“主語と述語を結びつけること（copulation)”とは“述語づけ（predication)”という行為や操作を表わすと共に、同時に“主語づくり（subjection）”という行為もしくは操作を表わす。[4] それは、複合した操作の名称であって、「その操作によって、(a)ある存在が厳密に選びだされて問題を限定し、問題が解決したことをテストする証拠としての素材を提供し、またその操作によって、(b)ある概念的意味・観念・仮説が、問題の特徴を記述し、問題の解決方法をさし示す述語として利用される。それは、相互に関係した主語と述語が機能的に対応していることを表わす名称なのである。[5]」以上の様に、Dewey によれば、[6] (1)コプラは、主語の現実的内容と述語の観念的内容を区別すると同時に結合する操作を表わすものであり、(2)判断は時間的な、現実再構成の過程なのである。

すなわち、(1)探究が事実条件の観察と観念形式という二つの操作を要求することはすでにみたが、もし観察が受けいれられた観念や仮説と関連をもた

ない素材に向けられ、観念や仮説もまた、観察によって得られた素材とは関連のない自分勝手な道をたどるならば、探求の過程をコントロールすることはできないであろう。たとえば科学的探求において、推論の過程で、かなりの期間、概念的な素材が独自に展開し、観察された素材が一時そのままにしておかれることがよくあるが、その場合も、こうした一見独立した展開の目的は、今後の実験観察という操作を誘発し方向づけるのにもっとも適した概念構造を獲得することにつきるのである。

そして既に述べてきたことから明らかなように(2)主語――述語の構造をもつ判断は、突然生じるものではない。一連の部分的判断を経て初めて、最終判断が得られるのである。すなわち最終判断の結果である最終的に解決された状況に、まだ達していない主語内容と述語内容は、仮に設定されて、それぞれたがいに区別され結合される。そして、主語内容についての命題、すなわち存在の諸性質の時間的・空間的な連関についての命題と、述語内容についての命題、すなわち存在の諸性質の意味や意味関係についての命題とは、それぞれ独立に展開するが、それらはまた、機能的操作的に関係して、最終的な状況と判断を決定する手段となるのである。この意味で、主語内容は、かりそめのものであって、最終的なものではない。そして判断のコプラは、この様な主語内容と述語内容をたがいの関連のなかでそれぞれの役割を果たすように働かせるもの、とみなすことができる。さらに伝統的論理学における形式的関係という用語とは区別された意味での判断のコプラは、題材を不確定な状況から確定した状況に現実に転化することを表わすものでもある。

以上で、Dewey における判断の構成についての考察を一応終えることにしたい。本章でわれわれは、最終判断は、中間段階の部分的判断の連続によって構成されることをみてきた。すなわちわれわれは、以上の考察で、判断の事実的なあるいは概念的な内容が暫定的で操作的な身分をもつことを、明らかにしたのである。前の問題状況を解決する過程で決定された、事実的なあるいは概念的な対象をそのまま利用することは、次の探究行為に、欠くことのできない実際的な価値をもつが、しかしこうした対象も、新しい探究で

は、再検討と再構成をする必要をまぬがれない。存在の連関についての命題や仮説に関する命題は、手段としての操作的な性格をもつかぎりにおいて、必要不可欠の役割を果たすのである。科学史が示しているように、仮説が究極的に真とされ、疑い得ないものとされてしまうと、それらは探究をさまたげてしまう。探究をコントロールするうえに不可欠の条件は、最もよく根拠づけられた結論のなかの結論でさえ新らしい問題に適用できるかどうかについて、探究しなおすだけの用意と用心をすることである。このように Dewey における探究は連続性をもった過程なのである。

以上で述べた、探究のプロセスや判断の構成についてのもろもろの考察から、次の様な結論が導き出される。つまりそれは「正真正銘の確認としての知識はすべて媒介をもつ」[7]ということである。すなわち Dewey の認識哲学の立場は、初めから本質的に前提のない直接的な知識といったものがあるという信念や、そうした知識がすべての媒介された知識の不可欠の前提であるという信念と対立する。すなわち Dewey は、合理的原理に関する直接的な知識があるという合理論的な認識論を批判し、感覚与件としての現実の対象や性質に関する直接的な知識があるという経験論的な認識論を批判的に乗り越えようとするところに、彼の認識哲学を構成しようとしたのであった。このようにしてわれわれは、Ⅱ章から始まったもろもろの考察を通して、われわれがこの小論文の最初でとりあげた Bollnow の問題意識、すなわちあらゆる疑わしいものを排除して、そこから確実な認識体系を一歩一歩進みながら構築していくことのできる“アルキメデスの点”を求めようとする伝統的な認識論（合理論的な観点であれ、経験論的な観点であれ）を批判し、「新しい認識は、それまでの古い理解を修正することによってのみ可能である」と述べ、あらかじめ与えられている不十分な認識つまり意見の修正の構造の中で認識成立の問題を考えようとする Bollnow の問題意識に立ちもどってきた訳である。この様な Bollnow の問題意識の光に導かれて、われわれは Dewey も、認識の成立を“連続した過程”“循環的な作業”としてとらえていることを跡づけることができたと思う。

次にわれわれは、最初にとりあげながら今だ残されているもう一つの問題すなわち、Bollnow と Dewey がそれぞれ知識獲得の二つの形式をどのように関連づけているのか、その問題に論及しておかなければならない。

〔注〕

(1) Dewey: *Logic*, p. p. 124～5
(2) Dewey, op. cit., p. p. 125～6
(3) Dewey, op. cit., p. 129
(4) Dewey, op. cit., p. 132
(5) Dewey, op. cit., p. 133
(6) ibid.
(7) Dewey, op. cit., p. 139

Ⅶ 知識獲得の二つの形式の関係

（Bollnow の場合）

ここでもまたわれわれはまず Bollow の“経験”と“研究”という二つの概念を、より詳しく規定し、この経験の二つの形式が、知識獲得の二つの形式としてどの様に関連づけられるのかを考察することから始めよう。

まず自然な“経験”とは、特定の個人が多くの体験から年月の経過とともに、その者の経験として身につける生活経験のことである。人は経験をする、とよく言われるけれども、彼の出会うのはまず意味のない事件である。後から消化して自分の生活の中に受け容れ、それを持続的に自分に同化し、自分の将来の態度を決めるために、一つの教えをそこから引き出す時に初めて、それは経験となる。このような生活経験は自然に生まれるものであり、ほとんど有機的ともいうべき成長過程において発達するものである。

それではこの“経験”は知識獲得の形式としてどの様な役割を演じるのであろうか。しかしこの自然な学問以前の経験を確実な学問的なものにまで高

めることの理論上の困難な点は、このような生活経験成立の過程では、経験する者を科学的に観察することが難しいということにある。すなわちこの様な生活経験は、比較と一般化、つまり帰納的な手続きによって意識的に構成されるものでもない、ということである。したがって、生活の自然な経験から、包括的な確実な認識を獲得しようという試みは、すでに完成した学問以前の経験をいつも初めから前提にして、その中に含まれているものを解釈しながら取り上げ、確実な概念的なものにする試み、すなわち自然な生活経験の解釈としてのみ成立し得るのである。Bollnow は“経験”が知識獲得の形式として果たすこの役割を、「学問以前に与えられた経験の解釈学」[1]と呼ぶ。

そして彼は、この様なきわめて個人的な個別的な生活経験も、それが各世代の経験の中で発展した言葉という主体間の媒質の中で形成されたものである限り、一般的に個人を越えた妥当性を求める生活経験についてわれわれは語ることができるし、また、人が言葉の中で表現するものを自分で経験している限り、個人自身の経験の中で得られた理解についてわれわれは語ることもでき、それらを、その上に立てられるべき学問的な認識の基礎と見なしてもよい、と主張するのである。

しかしそれでもなお困難は残る。というのは、人は自分の経験を故意に引き寄せることはできず、経験の訪れるがままに受け入れねばならないので、彼の経験の範囲は限界をもち、偶然性に支配されているからである。そこで人は、他人の生活経験をも補いとして受け入れようとして、直接に自分の経験に基づかない知識を利用しようとするけれども、そこでも現実の経験の偶発性を脱け出すことはできないという点で、本質的には前進はない。

それでは人は、現実の経験の偶然性を脱け出して、経験の透き間を埋めようと思えば、運よくその欠けていた経験が、自然にやってくるまで待つだけでは十分でない。人はむしろ未解決な問題に欠けている答えを、適当な用意をして奪い取らねばならない。ここで、Bollnow は、「ここに内面的な必然から、積極的な計画的に設けられた研究の（とくに現象の数的なとらえ方と、

意識的に用意された実験の）課題が現われる」[2]と述べている。こうして初めて、われわれは“研究”の領域、つまり方法的に確実な科学の領域に入ってきたのである。ただここで後に述べる Dewey の所論との関係で注意すべきことは、Bollnow が「この意識的に設けられた研究は自然な経験の直線的な“延長”として理解すべきではなく、本質的に新しい問いかけと新しい方法の、新たな始まりとして理解すべきである」[3]と述べている点である。

こうしてわれわれは、自然な学問以前の経験の領域から、積極的な学問的研究の領域へ足を踏み入れることによって、もはや、漠然と既にいつも与えられているものを意識化し概念的に説明する、つまり自分からは決して新しいものを生み出すことのできない手続きではなく、計画的に設けられた経験論的な方法によって、認識を生産的に増し、確実さを増す手続きを得ることができた。

しかしここで Bollnow は、この経験論的な研究の必然性と同時に、またその限界をも指摘して、いったいこの経験論的な研究の手段によって、自然な生活経験の全領域をとらえ、その方法的な研究の土台の上に、経験の全領域を学問的に確立することができるのか、と彼は批判的に問うのである。すなわち彼が問題にするのは、人間の精神の領域のあらゆる現象を、同じ様に実験的な研究や統計的な把握の対象とすることの本質的な制約のことである。彼は、観察可能な事実に還元でき、いつでも同じ様に検査できる事実のみが、勝手な意見とは区別された学問的な意味をもつという、経験論的な観点に批判的で、すなわち彼は「どうしても経験論的研究の世界に導き入れることのできない、特定の経験の領域があり、それに対しては、自然な経験の解釈、解釈学的な取り扱いが、理論的な取り扱いの唯一の可能な形式である」[4]という立場に立っているのである。

しかしわれわれは、この解釈学的な方法はこれまでの生活経験から得た理解を、いつも概念的な明確さに発展させることができただけであることを、もう一度思い出さなければならない。すなわちそれは既にその出発点から保守的なのである。自然な経験そのものの領域で、因習に固執し新しいものを

嫌う傾向があるのと全く同様の危険性が、理論的な世界でも繰り返し現われるのである。

この危険を除こうとすれば、われわれは先に与えられた理解の閉ざされた世界を打ち破り、経験論的な学問研究がもたらす個々の予期しない成果、しかもわれわれが信頼している観点をも動揺させるかもしれない新しい成果の侵入に対して門を開いていることができなければならないし、そこにそのような学問研究の個々の成果を受け入れ、これまでの人間と世界に対する理解全体に関連づけ同化するという"新たな解釈学的な仕事"[(5)]が生まれるのである。

こうしてわれわれは、自然な生活経験とその解釈、そして経験論的な研究とその諸成果の解釈の必然的な内的関係を洞察するところに Bollnow の認識哲学の基礎的な構造をさぐる手懸があると言えるのではなかろうか。しかしわれわれは今やあまりにも Bollnow の問題意識を追う作業に深入りし過ぎたうらみがある。だがわれわれは、再びこの様な Bollnow の問題意識の光に照らされて、次章で、第二次的な認識的経験を第一次的な非認識的経験の中で正しく位置づけようとする、Dewey の所論を跡づけてみることにしたい。

〔注〕

(1) ボルノーの前掲書 p. 185

"解釈学"

Bollnow は、ここでの解釈学の概念を、歴史的文献等の精神的客観態の解釈を課題とする Dilthey 以来の従来の精神科学的方法とは区別している。そして、次の様に述べている。「解釈学の概念は、このような連関においては、もはや客観態の解釈を意味するものではなく、日常生活でいつもなされているような"前理解"(Vorverständnis) の解釈、そのような前理解の説明を意味している。それは、ハイデッガーがその概念と人間の現存在の解釈学へと広げたような意味での解釈学である。」(小学館発行 1967年の『教育学全集2—教育の思想』所収のボルノー著、西村皓訳「教育学の科学的性格」p. 333)

(2) ボルノーの前掲書 p. 189

(3) ibid.

(4) ボルノーの前掲書 p. 196

(5) "経験論的研究の結果の解釈"

Bollnow は、*Krise und neuer Anfang* の中で、「経験論的研究 (empirischen Forschung) の前に完結してしまっているような先天的基礎づけ (apriorische Grundlegung) は、絶対に存在せず、むしろ経験論的研究の結果は、研究の根底に置かれた概念を絶えず修正し、常に新しい熟考 (Besinnung) を強いるのである。いわゆる哲学的根本概念は、つまり永遠に固定したものではなく、常に新たな経験の循環のなかで (im Umkreis einer immer neuer Erfahrung) 変化し、成長するものである。」(S. 127) と述べているが、彼によればここでもう一度、解釈学的課題が生じるのである。それは、今までの理解を経験論的研究の新しい結果と対決させて、発展させるという任務である。それとともに Bollnow においては、解釈学の概念は再び新しい広い意義を獲得する。すなわち、解釈学は同時に科学的研究の結果の解釈に発展する。

Ⅷ 探究の二つの形式の関係

(Dewey の場合)

さて Dewey の場合、"第一次的経験"と"第二次的反省的経験"という二つの経験に伴う探究の形式は、それぞれ"常識的探究"と"科学的探究"と呼ばれている。したがって次にわれわれは、この二つの形式をより詳しく規定し、Dewey においてはそれらがどの様に関連づけられようとしているのか、その点を考察してみよう。

まず Dewey は、われわれ人間が直接包まれている環境を常識的環境すなわち"世界"と呼び、そこで行動することによって必要な調整をしていく際に生じる探究を、"常識的探究"と呼ぶ。Dewey によれば、この常識的探究は利用と享受に関する問題を処理するために生じる探究である。すなわち利

用と享受は、人間がまわりの世界と直接関係を持つときのやり方であり、つまりわれわれがその環境内の物質をいかに利用するかの問題であり、同じ集団のメンバーや、全体としての他の集団に対して実際にどんな態度をとるかの問題である。

このように常識の問題やその探究は、人間が、利用と享受の対象を確立するために、周囲の条件のなかで行なう相互作用を取り扱わねばならないため、常識的探究が用いるシンボルは、集団の習慣としての文化のなかで決定されたものである。そうしたシンボルは、体系をなしているが、その体系は知的であるよりも実際的であり、集団の伝統・職業・技術・関心・確立された制度に応じて構成される。その体系を構成するのは、集団のメンバー間のコミュニケーションに用いられる共通の日常言語が伝達するもろもろの意味である。このような共通の言語体系に含まれた意味は、集団内の各人が物的対象や他のメンバーとの関係のなかで、して善いことと悪いことを決定する。何がどのように利用でき享受できるかは、そうした意味に支配されるのである。

この様に、利用と享受の問題は、利用しなくなるとか、利用を控えるとか、我慢とか、苦痛といった、利用や享受の反対概念をも含めて考えるならば、常識的探究の全領域にわたるということができる。常識においては、もろもろの対象や諸性質——感覚的であれ道徳的であれ——は、利用と享受の問題と結びついているからこそ、主要な役割を果たすことができるのである。

このような事実から明らかなことであるが、常識は質的なものとかかわりをもつ。すなわち常識は環境を質的に利用し享受することにかかわるものであり、したがって常識的探究は、質的な素材や操作と関連しているのである。常識的探究では、対象や出来事自体の認識が問題なのではなく、状況全体をとりあつかう際に、それがどういう意義を持つかを決めるのみである。勿論常識的探究にも必ずある事物の知識に達することが含まれている。しかしこのことは、利用と享受に関するある問題を処理するために生じるのであって、科学的探究の場合のように、それ自身のために生じるのではない。科学的探

究では、人間をなまの環境の中にじかにまきこむことはないのである。すなわち常識的探究は、理論的な科学的探究とは区別されたいわば実際的な探究である。

次に"科学的探究"についてであるが、まず第一に、科学にとって不可欠の出発点となるものは、何かを利用し具体的に享受しあるいは苦難する常識的世界の質的な対象、手続き、道具である。しかしそれらに関する知識は、直接応用される場合のあるなしにかかわらず集められる。それは、しだいにその源であった利用と享受の状況から離れていく。こうして、いわゆる科学の発達に役立つ素材と操作の背景ができるのである。

すなわち科学の対象は、利用と享受という活動の一要素としての環境に、あまり直接的な限定された関係を持たない。そして科学の対象には、時間・空間内の存在が必ず言及されているけれど、科学の題材は、特定の時と場所に存在する諸条件に縛られない。言いかえれば、常識的探究と科学的探究との相違は、かなり直接に現実に応用するときに決定される意義や意味と、たがいに整合的で矛盾がない体系的な関係を根拠にして決定される意義や意味との相違である。

すなわち、科学的探究においては、もろもろの意味は、特定集団の関心に直接結びつくことから解放された意味自体の性格に基づいて、相互に関係する。また科学的探究は、環境との直接的な相互作用から解放された意味の知的な抽象性にかかわるものである。そしてそこでは、"意味論的な整合性(semantic coherence)[1]"自体が、主要な問題である。すなわち科学的探究においては、もろもろの意味は、意味自体の互いの関係に基づいて決定される"関係(relations)"が探究の目的となり、具体的な個々の"性質(qualities)"は、第二義的なものとなって、関係を設定するたすけとなるかぎりでのみ役割をもつ。科学的探究において性質が第二義的なものになるのは、科学以前の常識の場合のように、それ自身究極の重要性をもつ事柄ではなくなり、道具としての任務しかもたないからである。ここに「質的な合目的な題材(qualitative and teleological subject-matter)」から「質的で

も合目的的でもない関係(non-qualitative and non-teleological relations)」への移行[2]があり、そこに科学的探究という第二次的な論理的形式が生じるのである。

それでは次に、常識的探究と科学的探究の相違及び関係について、Deweyがどの様に考えているかその点を考察してみよう。

まず両者の間にあるギャップから述べれば、(1)常識的探究は、既に述べた様に質的な分野にかかわるのに対して、科学的探究は、量その他質的でない数学的な関係によって題材を述べるのである。また、(2)前者は、直接間接に利用と享受の問題にかかわるゆえに、合目的的なものであるのに対して、後者の科学的探究の操作は"動力因(efficient causation)"——"目的因(final causes)"によってではない——に基づいているのであって、目的や価値とはかかわりがない。

しかしDeweyによれば、この両者の相違を、一方に経験的な知識や実践、他方に合理的な知識や純粋な活動という区別におきかえ、あるいは実践と理論、経験と理性の区別に定式化することを認めない。彼によれば、常識的探究と科学的探究の違いは、一方が実際的に利用し具体的に享受するためのテーマであり、他方が科学的に結論を下すためのテーマであるというように、両者が直接関係する問題の違いであって、それぞれの論理の違いではない。すなわちDeweyによれば「常識と科学の探究構造は基本的には一つ」[3]なのである。

つまりDeweyにおいては、科学のテーマは常識のテーマから生まれ、それと関数関係にあるものと、考えられている。そして彼の立場によれば、合理的な論議のなかで形成され展開されたもろもろの概念が妥当かどうかは、それらが現実の質的な素材に適用できるかどうかでテストされねばならず、概念は、合理的な論議の要素として切り離されたときにはもはや"真"とされず、常識の質的な素材を組織しそれらをコントロールすることができる度合いに応じて妥当とされる。

すなわちこの様なDeweyの観点を要約すれば[4](1)科学のテーマと手続き

は、常識のすなわち実際的な利用と享受の直接的な問題と方法から生じ、(2)常識の支配していた内容と作用を洗練し、拡げ、自由にするような仕方で、常識に働きかけるものなのである。以上が、Deweyにおける常識的探究とその論理および科学的探究とその論理の相違と関係についての所論の大筋である。

〔注〕

(1) Dewey : *Logic*, p. 116

(2) ibid.

(3) Dewey, op. cit., p. 79

(4) Dewey, op. cit., p. 66

Ⅸ いくつかの問題点と結論 (1)

(質的な題材を対象とする常識的探究と
質的でない関係を対象とする科学的探究)

次にわれわれは、Ⅶ章で述べたBollnowの問題意識との関連において、Deweyの所論にひそむ問題点を指摘しておきたい。

まず、Deweyは(1)質的な分野にかかわる常識的探究と、質的なものを排除し、質的でない数学的な関係へ還元する科学的探究とのギャップを統一することに果たして成功していると言えるのだろうか。Bollnowは既に述べた様に人間の自然な生活経験の全領域や精神の領域のあらゆる現象を、同じように実験的な研究や統計的な把握の対象とすることの本質的な制約のことに言及している。すなわち人間関係の分野における経験論的な研究の限界を指摘している。Bollnowが経験論的な研究を、自然な経験の直接的な延長としてではなく、本質的に新しい問いかけと方法として理解している様に、Deweyにおいても、高度に方法的な「科学の題材が常識によくみられるシンボル群とは根本的にちがったシンボル群によって叙述される」[1]ことを認め、

「科学の問題は、一連のデータと非常に分化した意味やシンボルの体系を必要とするから、科学を“組織化された常識（organized common sense）”とよぶのはまちがっている[2]」と述べている。しかし Dewey の場合、科学的探究の論理が、物質的な事柄を技術的に応用する分野では強力な組織力を持ち得ても、常識にとって重要な領域、すなわち宗教的・芸術的・道徳的・政治的・経済的な観念や信念の領域に関しては比較的無力であるのは、常識的探究と科学的探究のそれぞれの論理の相違に基づくものではなく、そうした人間関係の分野が、今なお実験的な科学が盛んになる前の信念・概念・慣習・制度の影響下にあるという社会的な理由によるものと考えている。そして科学的方法の衝撃を、人間のもっとも大切なもっとも深い関心や価値と根本的に対立するものと考える考え方や、価値や理想の領域を、科学的方法の適用が全くきかないものとして残しておこうとする考え方に批判的である。この点で Bollnow と Dewey の立場は対立するよう思われる。すなわちこの点に関する Bollnow の立場は「どうしても経験論的研究の世界に導き入れることのできない特定の経験の領域があり、それに対しては、自然な経験の解釈、解釈学的な取り扱いが、理論的な取り扱いの唯一の可能な形式である」という立場であったからである。

これに対して Dewey の問題意識は、質的な分野に関わる常識の習慣的方法をコントロールできる様な、科学の実験的・操作的探究の信頼すべきパターンを手に入れ、そこに常識的探究の論理と科学的探究の論理を統一する探究理論を求めることにある。われわれがⅤ・Ⅵ章で述べたことは、Dewey のこの様な試みの具体的な内容なのである。もう一度その要点に言及すれば Dewey においては、探究の過程で、観察された事実条件に基づいてある観念が形成されていく際に生じる推論は、意味の知的な抽象性あるいは“意味論的な整合性”に基づいて行われるが、そこで形成された観念は、それに導かれた実験観察の結果によってテストされ修正されていくべきものであり、そもそも最初の観察が問題状況の性質によって条件づけられているものであることを考えれば、Dewey において“意味論的な整合性”といわれるもの

が、経験から抽象された純粋に合理的な論理形式以上のものであることがわかる。[3]

すなわち Dewey によれば、論理形式は、すべて探究の操作のなかで生じ、その操作が“正真正銘の確認（warranted assertion）[4]”を生むように探究をコントロールすることにかかわりをもつ。したがって「すべての論理形式は正しくコントロールされた探究の手段と結果の関係の実例である。[5]」言い換えれば、Dewey における論理形式は、経験的素材から発したものであり、それらを取り扱う手段としての方法と結果としての結論の関係の分析的な吟味から得られたものなのである。

ここで Dewey は“合理性（rationality）”ということについて次の様に述べている。「合理性は手段と結果の関係の問題であって、究極の前提としての……固定した第一原理（fixed first principles）の問題ではない。[6]」すなわち Dewey の立場からすれば、“合理性”とは「意図された結果を最大限の確からしさで生みだす手段をさがしもとめ選びだす[7]」ことなのである。すなわち「抽象的な概念としての合理性は、まさに手段――結果の関係（the means-consequence relation）そのものを一般化した観念である。[8]」以上の様に Dewey は、科学的探究における論理形式を、常識的探究における現実の素材から生じ、その論理形式がそこから展開されてきた経験的素材を変化させるものとして、把握しているのである。そしてこの意味で彼は「“経験（experience）”を正当に理解するかぎり、推理（inference）や推論（reasoning）や概念構造（conceptual structures）は、観察（observation）と同様に経験的（experiential）である[9]」と言うのである。

以上の考察から、われわれは Dewey のいわゆる科学的探究の論理は、Bollnow が経験論的研究で意味している様な、対象を実験的・統計的に把握する論理よりは、より広い意味内容を持ち、したがって Bollnow が言及した「どうしても経験論的研究の世界に導き入れることのできない、特定の経験の領域」をも探究の対象にし得る様な論理であると言えるのではなかろうか。Bollnow と Dewey に科学をヒューマナイズするという観点があるとす

れば、Bollnow が経験論的研究の諸成果の解釈学という方向をとっているのに対して、Dewey は、科学の方法における暫定的・仮説的な観念的・概念的操作に特別の意味と機能を与え、そこに科学と哲学の接触を考えようとしたのである。そこに彼の“科学”ならざる“科学的探究”の意義があるのであろう。

〔注〕

(1) Dewey : *Logic*, p. 76

(2) Dewey, op. cit., p. 77

(3) “意味論的な整合性”
Dewey においては、与えられた問題状況の解決の方向が現実そのもののもつ意味的構造の中に与えられている、という認識があるように思われる。

(4) Dewey, op. cit., p. 9

(5) Dewey, op. cit., p. 11

(6) Dewey, op. cit., p. 9

(7) Dewey, op. cit., p. 10

(8) ibid.

(9) Dewey, op. cit., p. 38

X いくつかの問題点と結論 (2)

（合目的的な題材を対象とする常識的探究と、
合目的的でない関係を対象とする科学的探究）

さて最後にわれわれは、(2) 常識的探究と科学的探究との関係についての Dewey の所論にひそむもう一つの問題点に触れておかなければならない。すなわちそれは、常識は観念や方法をコントロールするために根底から合目的的であるのに、科学は故意に目的にたいして無関心であるという問題についてである。Dewey は、しかしだからと言って、両者に根本的な相違があ

ると考えるのは誤りであると考える。すなわち Dewey は、科学が常識の世界の中に、あるいは常識の世界を取り扱う活動のなかに具体化したことが、人間と物質的自然との関係に影響を及ぼすと共に、人間の相互関係の領域にも大きな影響を及ぼした事実に注目している。たとえば生産や分配やコミュニケーションの能力と条件を革新するために、科学を応用したことは、必然的に、人間が互いに関連しながら生活し行為していく条件を大きく変えた。しかし Dewey は、科学技術が現実的な生活条件を変えた事実だけでなく、むしろ新しい力と道具の発明が、新しい目的を生む事実に注目する。すなわちそれらは新しい結果を生み、この結果が人間をかきたてて、新しい目的をたてさせるという事実に注目するのである。事実、自然科学は常識のもつ目的や範囲を開放し、拡大し、またそれを達成するために利用できる手段の範囲と力を非常に増大させた。この様な事実から Dewey は「科学は、目的や目的に合うように考慮されコントロールされた探究を排除しないで、逆に目的をもった活動や思考を大いに開放し拡張した」[(1)]と主張するのである。

ここでわれわれは Dewey においても、Bollnow が経験論的な学問研究がもたらす個々の予期しない成果、しかもわれわれが信頼している観点をも動揺させるかもしれない新しい成果の侵入に対して門を開いていなければならないと述べているのと、類似の問題意識があると言えよう。しかし上述したことは科学的探究の結果が常識的探究が取り扱う目的や価値の領域に及ぼした影響の問題であって、合目的的な常識的探究の論理と、そうでない科学的探究の論理の統一の問題ではない。

それでは Dewey は“目的”の概念を科学的探究の論理の中で、どのように位置づけようとしているのであろうか。ここでもわれわれは、再びV・VI章で述べた Dewey の所論に立ちもどって考えることができる。すなわち彼によれば、目的は、観察された事実条件に基づいた、ある特定の問題状況の解決法の“予見（foresight）”として与えられる。しかしこうして形成された目的に関する観念も、最終的な真理としてではなく、絶えず中間的な暫定的な“ends-in-view”もしくは“仮説”として定位され、それに基づいて

行なわれる実験観察の結果によってテストされ、常に更新されていくものなのである。そして Dewey は、この仮説的な解決法を暗示していくところに哲学の役割を位置づけている。したがって彼によれば、このような解決法は、あくまでも問題状況を構成する事実条件を踏まえたものでなければならないが、しかしその事実条件を設定し、その意味を解決し、そこから解決法を暗示する過程では、探究者の価値観や理想が反映することは充分考えられるし、むしろそのことは避けられないと言えよう。ここに Dewey における科学と哲学の接触の問題がある。しかし彼によれば問題状況の解決は"客観的"な解決でなければならず、"主観的"な解決では、真の問題解決とは言えない。

ただここで見逃してはならないことは、彼には他方"自己を宇宙に完全に根底から調和させること（a thoroughgoing and deepseated harmonizing of the self with the Universe)[2]"としての"adjustment"[3]という概念で示唆されているような、究極的な目的ともいうべきものが前提されているのではないか、ということである。このような概念で指示されている実体が何であるかについては、ここでのわれわれの直接的な関心事ではない。われわれにとって重要な事柄は、それが観察によっても、思考（thought）によっても、また実践的な活動（practical activity）によっても到達されるものではなく、それは"想像（imagination)"の投影であり所産であるということである。[4] ここでわれわれは、科学的探究の実験観察の操作に基づく"予見"として設定される"ends-in-view"とは異った目的の概念に逢着する。"想像"によって把握されるこのいわば究極的な目的は、したがって Dewey においてもやはり、科学的探究の領域がカバーできない領域に属するものとして残さざるを得ないのではなかろうか。

さて、しかしだからと言って、Dewey によれば、この"想像"はわれわれの独自の決意や決心にしばしば伴う恣意性からは免がれているものなのである。ちなみに彼は次の様に述べている。「われわれをかりたてる目的や理想は想像を通して生み出されるものである。しかしそれらは空想素材（im-

aginary stuff）から生まれたものではない。それらは身体的社会的経験の世界に属する硬質な素材（hard stuff）から生まれたものである」[5]と。それにもかかわらず、この"想像"が科学的探究の論理の領域の外にはみだすものであるとすれば、この"想像"の領域を支配する論理を、われわれはどこに求めたらいいのであろうか。われわれは今 Dewey の言葉を借りて、そこに、特定の個人の"充分に統合された人格（a fully integrated personality)[6]"の"identity"を保証する論理ともいうべきものを要請できるのではないかと思う。そしてこの個人の人格的統合を可能にする論理を、われわれがこの小論文の最初で区別した Dewey の二つの経験の概念に即して、"experience as experimental の論理"とは区別された意味で、新しく再び"experience as empirical の論理"という言葉で呼びたいと思う。しかし今ここで言う"experience as empirical"は、"第一次的経験"の"primitive naïveté"[7]を免がれたものであり、困難な認識的経験（つまり"第二次的反省的経験"）を経て洗錬された、いわば"a cultivated naïveté of eye, ear and thought"[8]ともいうべきものによって特徴づけられた直接的経験のことを指しているのである。ここに到達された経験の領域においては、現実的世界の事物を利用し享受することが問題なのでもなく、そのためにそれらを認識することが問題なのでもない。そこでは現実の"身体的社会的経験の世界の硬質な素材"の抵抗に合って、われわれが一個の人格として、それらに対してどの様な態度をとるかが問題なのである。すなわち、ここで Dewey が問題にしているのは、個人の主体の内部にあって、個人の人格的統合をもたらす"active relation between ideal and real"[9]とでも表現されるような新たな経験の論理である、と言えるのではなかろうか。

ここまで Dewey の問題意識をたどってきた時、われわれは再び Bollnow の問題意識に非常に近づいていることを知るのである。すなわち Bollnow は、個々の生活経験がたとえしばしば本当に苦痛に満ちた絶望的なものであっても、その結果としては、人がその経験によって成熟するというきわめて積極的に評価すべき現象のことを問題にしている。しかも Bollnow が問題

にするのは、反省的思考を伴わないたんなる惰性や空虚な熟練からいつもたえず身をもぎ放して、人が自分の独自性へ、自分の完全に生きた生活へと奮起する“批判”の課題なのである。そして Bollnow は、この“批判”を認識の機能の中に新しく価値づけようと試みるのである。すなわち彼によれば「認識は本質的に批判である」[10]というのである。そして Bollnow は、さらにわれわれが無意識化した現実との交渉の中での疎外に対して“直観への復帰”[11]をすることによって、内面的に若返り、その中でわれわれの独自な本質を実現するという課題のことを述べ、この“直観”という形式を認識の中で位置づけようとする。ここでわれわれは Bollnow の“直観（Anschuung）”の概念との関連で、Dewey の“想像（imagination）”の概念を想起することができるが、両者の比較検討については、他日の課題として残さざるを得ない。

最後に、われわれは、Bollnow が示唆している“認識論から実際の認識の哲学への転換”[12]という決定的な問題設定の転換について言及し、Dewey の認識哲学も、今後その様な観点から解釈され吟味される可能性と必要性があるのではないかということを暗示して、この小論文のしめくくりとしたい。

すなわち Bollnow は、認識を確立し改善する技術的な学問のことではなく、認識の本質と機能を人間生活の全体の関連からとらえる課題のことを問題にしようとするのである。彼の認識の哲学において大切なのは、もはや認識の技術ではなく、その認識から人間の現存在を解明することである。Bollnow が知ろうとするのは、「人はその認識の中で、経験・知覚・直観などの中で、何をするのか、その際に何を得て、どうして結局は認識の中でのみ自分自身となることができるのか」[19]ということである。そして彼は、このような転換を表わすために、伝統的な認識論とは区別して“認識の哲学（Philosophie der Erkenntnis）”[14]という言葉を用いるのである。この観点の転換は、言い換えれば認識確立の問題から「人格的統合（personal identity）」[15]の問題への関心の転換ということもできよう。

〔注〕

(1) Dewey : *Logic*, p. 78

(2) Dewey : *A Common Faith*, New Haven and London, Yale University Press, 1967, p. 19

(3) Dewey, op. cit., p. 16
"adjustment"
小島博士は、この語を「順応」と訳しておられる。博士によれば、この順応は、「社会環境との交渉の過程において起る自己内部の根本的変化を軸として展開される態度」であり、それは「単に外界の圧力に自分を適合させてゆく」態度（accommodation）でもなく、「自分の欲望のように外界を変様しようとする態度」（adaptation）でもない。それは、「自分をも含む現在の状況を包んでいる全体に自分を合わせてゆこうとする態度」である。あるいはまた順応とは、「全体の中に生きる部分（人間主体）が、自らの部分性を自覚してそれにふさわしい態度をとること」である、と博士は解しておられる。（小島軍造著『民主化と倫理――“状況に生きる”ことの意味』上武大学論集抜刷 1969, p. p. 12～3 参照）

(4) Dewey , op. cit., p. 19

(5) Dewey , op. cit., p. 49

(6) Dewey , op. cit., p. 51

(7) Dewey , *Experience and Nature*, p. 37

(8) ibid.

(9) Dewey : *A Common Faith*, p. 51

(10) ボルノーの前掲書 p. 225

(11) ボルノーの前掲書 p. 226

(12) ボルノーの前掲書 p. 230

(13) ボルノーの前掲書 p. 232

(14) ibid.

(15) Leroy F. Troutner : *The Confrontation Between Experimentalism and Existentialism : From Dewey Through Heidegger and Beyond*, Harvard Educational Review, Vol. 39, No. 1, Winter 1969, p. 124

終章　決定的な問題設定の転換

この決定的な問題設定の転換の必然性について、今少し言及しておきたい。

さて Leroy F. Troutner も述べているように、「彼（Dewey）の主な関心の焦点は本質的に認識論的なものである」[1] と言えよう。そして、Dewey は、人間存在をも、他の自然的な対象や事物を取り扱うのと同じカテゴリーで理解しようとしている。彼においては、What is a flower? あるいは What is a horse? という問いと、What is man? という問いは、本質的に異なるものではなかった。事実「Dewey の主なカテゴリーである "experience" は常に自然と連続したものとして見られている。」[2] 彼の自然主義的な立場から言えば、人間は自然の部分であり、自然の内部で自然的なものとして生まれたものである。そして「人格（personality）や個性（selfhood）や主観性（subjectivity）は、有機的社会的な相互作用が複雑に組織化されるとともにその結果として現われてくる機能である」[3] と考えられているのである。

つまりここに述べられている人格といい個性といい主観性といわれているものも、Dewey においては "the process of transactional events out-there" として説明されるべきものであって、実存主義が問題にするような "(the process of) lived reality, or human existence, as viewed from within" とは異質のものである、[4] と言わなくてはならない。ここでわれわれは Troutner とともに次のように言うことができよう。つまり「哲学的人間学は、明らかに、彼（Dewey）の著作にはほとんど顔を出していない。しかしそれは彼が個人に関心を示していないからではない。現に彼は個人の尊厳や価値に造詣の深い配慮を示し続けている。そうではなくて、それは、彼の主な哲学的な焦点が、人間によって生きられる現実（the lived reality of man）におかれているのではなく、Dewey のいわゆる人間が適応していかなければならない "organism-environment problematic" situation におかれているからである。彼が人間的なもの（the human）を取り扱う時にも、

それは彼の主な関心、つまり新しい探究の理論を発展させるという関心にとっては、付随的なもののように思われる。Dewey の中心的な関心は、科学の方法をいかにして人間の問題に適用することができるか、それを示して見せることである。[5]」

もちろん Dewey は、われわれがすでに見てきたように、「価値と意味に満ちあふれたすべてのものを含む直接的な質（immediate qualities）の領域」[6] である直接的経験（immediate experience）に多大の関心を払っている。しかし Dewey にとっては、そのような直接的経験を生み出す条件を考察することが問題なのであって、実存主義の立場、たとえば Heidegger のように、そのような直接的経験の存在論的記述を試みようとすることが問題ではなかった。

そしてこのような「Dewey の第一義的には認識論的な関心は、人格的統合（personal identity）という重大な問題を探究するのにふさわしい基礎を提供することはできない」[7] というのが、今日の実存主義の立場からの問題提起である。つまり今日、実存主義の立場から問われているのは、What is man? という認識論的な問いではなく、Who is man?（Who am I?）という存在論的な問いなのである。すなわち「What is man? と問うことは、人間が他の事物と共に自然の中に現象している（out there）ひとつの対象であることを意味する。……それに対して、Who is man? と問うことは、問いを、自然の中の一般的な（generic）人間にではなく、歴史の中に存在する特定の個人に向けることである。それは、現象としての人間（man out-there）にではなく、主観性における人間（man in his subjectivity）に問いを向けることである。[8]」

前章で述べた伝統的な認識論から実際の認識の哲学への転換という、決定的な問題設定の転換は、上述したようなコンテキストにおいて一層よく理解できると思う。このような転換を経て、認識確立の問題は、個人の人格的統合の問題、つまり人間形成の問題と密接不可分の関係を持つようになる。

そして同時にこのような決定的な問題設定の転換は、単に認識論的な意味

を持つにとどまらず、教育的にも極めて大きな意味を持つと言えよう。すなわち「科学によって媒介される相互作用的な出来事という観点から教育をながめることと、ひとりの人間の生成（the becoming of a person）という観点を第一義にして教育をながめることとの間には、重大な相違がある。[9]」そしてそれは、有機体と環境との関連における問題的状況の解決という観点で教育を見ることから、特定の人間によって生きられる現実という観点から教育を見ることへの転換を意味するのである。

〔注〕

(1) Troutner, op. cit., p. 130
(2) Troutner, op. cit., p. 127
(3) Dewey : *Experience and Nature*, p. 208
(4) Troutner, op. cit., p. 132
(5) Troutner, op. cit., p. 130
(6) Dewey, op. cit., p. p. 85～86
(7) Troutner, op. cit., p. 124
(8) Troutner, op. cit., p. 126
(9) Troutner, op. cit., p. 151

参 考 文 献

1. Bollnow, Otto Friedrich : *Krise und neuer Anfang —— Beiträge zur pädagogischen Anthropologie* —— Quelle & Meyer Heidelberg, 1966
   ボルノー著、西村皓・鈴木謙三共訳『危機と新しい始まり』理想社、昭和43年
2. ボルノー著、西村皓訳『教育学の科学的性格』（『教育学全集 2』小学館、1967 所収）
3. ボルノー著、浜田正秀訳『人間学的に見た教育学』玉川大学出版部、昭和44年

4. Dewey, John : *A Common Faith* New Haven and London, Yale University Press, 1967
5. Dewey, John : *Experience and Nature*, Dover Publications, Inc., New York, 1958
6. Dewey, John : *Logic-The Theory of Inquiry*-Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1964
   デューイ著、魚津郁夫訳『論理学——探究の理論』（『世界の名著』48. 中央公論社、昭和43年 所収）
7. Dewey, John : *The Quest for Certainty*, Capricorn Books, G. P. Putnam s Sons, New York, 1960.
8. 小島軍造著『民主化と倫理——"状況に生きる" ことの意味』（上武大学論集抜刷 1969）
9. Troutner, Leroy F. : *The Confrontation Between Experimentalism and Existentialism : From Dewey Through Heidegger and Beyond*, Harvard Educational Review, Vol. 39, No. 1, Winter 1969

A Study of the Relation between Knowledge and Experience in John Dewey's Theory of Knowledge

——closely following the views of O. F. Bollnow——

Kitagawa, Haruo

Summary:

O. F. Bollnow criticizes the traditional epistemologies —— both the rationalistic which lays the foundation of our knowledge on the clearness and distinctness of first propositions, and the empiristic which builds up it on some simple sense-perceptions given to us, and moreover he calls in question the possibility of finding out an Archimedian point on which the system of warranted knowledge, freed from any doubt, can be constructed step by step. Bollnow holds that our knowledge can only be attained in a circular process of modifying our opinion —— insufficient understanding which we have had. He calls this "Die Unmöglichkeit eines archimedischen Punkts in der Erkenntnis." and tells that new knowledge can be attained only through modifying old understanding.

We can find the same point of view in John Dewey's theory of knowledge. He also criticizes, on one hand, rationalistic schools which hold that ultimate principles of a universal character are the objects of immediate knowledge, and that reason is the organ of their apprehension, and he is critical, on the other hand, about empiristic schools which believe that sense-perception is the organ of knowledge, and that the things immediately known are sensory qualities or sense-data. Dewey holds that our knowledge develops into shape in an ongoing self-corrective process of inquiry.

One more point of view which we can point out in common in the theories of knowledge of Bollnow and Dewey is of supremacy of real experience over theoretical knowledge. Before considering the relation between knowledge and experience, we first begin to examine the idea of "experience" in both cases of Bollnow and Dewey. Bollnow uses that idea in two different meanings, that is, "Erfahrung" and "das Empirische", while Dewey distinguishes "experience as empirical" from "experience as experimental". Bollnow critically asks, on one hand, in what degree a universe of our ordinary life experience ("Erfahrung") can be apprehended by means of methodological empirical investigation ("das Empirische"), and maintains that a certain field of experience is necessarily left outside the region where empirical investigation can be applied, and that in that field the interpretation of meanings of ordinary experience or the hermeneutic treatment of them is only possible way of theoretical treatment. He holds, on the other hand, that there never is any a priori foundation which is settled before empirical investigation and, on the contrary, the results of empirical investigation constantly modify the idea which is taken as a basis of the investigation and always force us to a new consideration, and that the so-called philosophical basic idea is never something fixed once for all, but alters and develops in a circle of continually renewing experiences. In such a way, Bollnow tries to define the function of two modes of experience interrelated to each other——"Erfahrung" and "das Emprische"——in his theory of knowledge.

Secondly, according to Dewey, "experience as empirical" is called in another word "primary experience", and it implies non-cognitive experience which we have in our ordinary daily life. It also signifies immediate experience, in the domain of which the principle of use and

enjoyment works. "Experience as experimental" is, on the other hand, called "secondary or reflective experience", which is cognitive and is regulated by the rules of reflective thinking. And Dewey refers the secondary cognitive experience to the fertile plain of the primary non-cognitive experience. His theory of knowledge claims two things : First, that refined methods and products of secondary experience be traced back to their origin in primary one, in all its heterogeneity and fullness; so that the needs and problems out of which the refined methods and products arise and which they have to satisfy be acknowledged. Secondly, that the secondary methods and conclusions be brought back, for verification, to the things of ordinary experience, in all their coarseness and crudity.

In this essay, we, through comparing such respective points of view of Bollnow and Dewey, will enter into details of Dewey's theory of inquiry and examine some problems concerning the relation between knowledge and experience in his theory of knowledge.